

カザフスタン（2023 年度）

- [国・地域別情報トップページへ](#)
- [各国・地域情勢](#)
- [在カザフスタン日本国大使館](#)

- 2021 年度日本語教育機関調査結果
- 日本語教育の実施状況
- 教育制度と外国語教育
- 学習環境
- 教師
- 教師会
- 日本語教師派遣情報
- シラバス・ガイドライン
- 評価・試験
- 日本語教育略史

1.2021 年度日本語教育機関調査結果

機関数	教師数	学習者数								
		合計	初等教育		中等教育		高等教育		その他教育機関	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
8	38	611	0	0.0%	15	2.5%	310	50.7%	286	46.8%

（注）2021 年度日本語教育機関調査は、2021 年 9 月～2022 年 6 月に国際交流基金（JF）が実施した調査です。また、調査対象となった機関の中から、回答のあった機関の結果を取りまとめたものです。そのため、当ページの文中の数値とは異なる場合があります。

[「海外日本語教育機関調査」のページへ](#)

2.日本語教育の実施状況

全体的状況

沿革

カザフスタンでは、以前より日本の伝統文化に対する関心が高くなっている。また、自動車やロボットなどハイテク技術は若者にとって憧れであり、近年では、日本語学習の動機の一つとなっている。これまでは旧首都のアルマティにおける日本語学習が主体であったが、新首都のアスタナの日本語教育機関との連携強化が見られるようになった。さらに、地方都市においても自主的に日本語を学習する例が見られる。

1992 年にアル・ファラビ名称カザフ民族大学（現アル・ファラビ名称カザフ国立大学、以下、カザフ国立大学）東洋学部中国語学科において日本語コースが設置されたのが、カザフスタンにおける日本語教育の本格的な始まりと言える。2024 年 2 月現在、日本語専攻コースを持つ大学は、上記のカザフ国立大学東洋学部韓国日本学科、アブライ・ハン名称カザフ国際関係外国語大学東洋学部極東言語学科（以下、カザフ外国語大学）、首都ア

スタナにある L.N.グミリョフ名称ユーラシア国立大学国際関係学部東洋学科（以下、ユーラシア大学）の 3 校である。2024 年 2 月現在、カザフ国立大では学部生 66 名、修士 7 名、博士 4 名、カザフ外国語大学では学部生 50 名、ユーラシア大学では学部生 50 名、修士 2 名である。また、ユーラシア大学では副専攻として、学部生 44 名が日本語を学んでいる。

2009 年度までカザフ経営経済戦略大学（KIMEP）とアバイ名称カザフ民族教育大学においても日本語教育が行われていたが、現在は行われていない。また、第二外国語コースがあったカザフ国立大学国際関係学部においても 2013 年度夏に閉講された。ナザルバエフ大学においても日本人教員により「日本語クラブ」が組織され、学生 90 名ほどに対して日本語教育が行われていたが、この日本人教員が 8 月に日本へ帰国、2014 年秋よりカザフスタン日本人材開発センター（以下、日本センター）JF 講座より講師を派遣（出前講座）した。しかし 2016 年秋よりクラブが独自に日本人講師を雇い、出前講座は終了した。2017 年日本人講師の帰国により、現地教師を新たに雇用し 50 名ほどを対象に継続し、その後、中断期間を挟み、2023 年 9 月から同大学修士課程に入学した学生を教師として講座を再開した。毎年 11 月には自主運営による学生祭「Japan Day」を開催している。

高等教育機関においては、2007 年 9 月にカザフ国立大学において、日本語専攻の大学院修士課程が設立され、2019 年までに約 40 名の修了者を出している。2012 年度には日本学科東洋歴史コースから博士課程への進学者が出ており、2023 年時点で計 3 名が修了している。またこれ以外にも、日本の大学の修士課程、博士課程へ進学する者もいる。

初等・中等教育においては、1996 年にアルマティ第 2 学校で日本語教育が開始され、続いて 1998 年には、アルマティ第 12、123 学校、及びジャンブール第 45 学校、2002 年からは第 58 中学校、第 120 言語ギムナジウムでも開始されるなど一時的に勢いを見せたが、2013 年に、専門家が開発したカリキュラムがないとの理由で教育科学省から初等・中等教育の日本語コース閉鎖が命じられた。しかし、2018 年 2 月、初代大統領の名を冠する Nazarbayev Intellectual School（以下 NIS）において日本語のパイロットコースがスタートし、同年 9 月より選択科目の一つとして取り入れられた（アスタナ、アルマティ各 1 校）。ただし、まだ正課の科目とはなっていない。また、アスタナの中等教育において、クラブ活動としての日本語を始めた学校もある。

背景

元来、カザフスタン人は、日本に対して、経済・技術大国でありながら独自の文化を伝承し続けている国として憧れが強く、国造りのモデルとして高い関心を持っている。また、民族的な類似性などから日本に親近感を抱いている者も多く、その流れで日本そのものや日本文化をより深く知りたいとの思いから日本語を学習し始める学生が多い。コロナ禍直前の 2019 年、14 回目の開催を迎えた日本文化デー（在カザフスタン日本国大使館、日本センター、日本人会共催）では、5,000 人の来場者があり、2022 年の再開後、2023 年にも約 4,000 人が来場し、日本文化への関心が高いことがわかる。近年経済的に豊かになりつつあるカザフスタンでは、経済的に発展・成功した国の言葉を学んで、自国の発展を担う人物になるべく、日本語学習を始める者も多い。また、着物や書道、日本料理などの伝統文化にとどまらず、若年層ではアニメを中心とするポップカルチャーへの関心も高い。地理的に距離はあるものの、日本文化の波は確実に押し寄せ、日本語学習の動機の一つとなっている。さらに学年が上がると、各自がより具体的な関心を持ち始め、現代文学や日本史を研究テーマとして勉強する学習者も高等教育機関では見られる。

特徴

大学等高等教育機関を中心に、国全体の学習者数は増加傾向にある。しかし、大学卒業後、通訳業への従事や、日本企業への就職を希望する学生の思いとは裏腹に、実際の卒業後の進路は困難な状況にある。教員の賃金水準

が低いと、優秀な人材が他分野に流れる傾向にあることは否定できず、優秀な教員が教職を離れることで大学の日本語教育の質が下がり、それが学生の就職難に繋がるという悪循環が見られる。また、日本語教育を続ける教員にしても、学内事務の処理に追われ、スキルアップに割く時間もないのが現状であり、日本語教育を巡る環境は厳しい状況にある。

カザフスタンは現在外国語学習ブームに沸き立っているが、その中心は英語、中国語、韓国語、カザフ語と似ているトルコ語など就職に有利な言語であり、最近ではフランス語及びドイツ語の人気も上昇している。一方、日本語はまだ特殊な言語と見なされている。

最新動向

カザフスタンは2024年2月現在、コロナ禍を経て、中等教育、高等教育は対面授業へと戻っている。一方、学校教育以外は、オンライン体制を継続しているところが多く、日本センターではオンラインクラスが6、7割を占め、他の民間学校はほとんどがオンラインのみで授業を提供している。

教育段階別の状況

初等教育

日本語教育の実施は確認されていない。

中等教育

上述のNISにおいて2022年12月現在、アスタナNISでは33名が日本語を選択している。アルマティNISでは入門クラスが17名、継続クラスが10名となっている。どちらも12歳から17歳の生徒たちである。

使用教材は授業担当者が選択しており、過去には『まるごと 日本のことばと文化』が使われていた時期もあったが、2023年時点では『みんなの日本語』がメインテキストとして使われている。

高等教育

カザフ国立大学とカザフ外国語大学において主専攻（第一外国語）、ユーラシア国立大学において主専攻及び選択科目（第二外国語）として日本語が教えられている。

カザフ国立大学がカザフスタンで最も日本語教育の歴史が古い高等教育機関であり、2024年2月現在、修士課程博士課程を含めて約77名が在籍している。学科の設置目的は、日本語・日本研究者及び教師、企業において日本語で業務が行える人材、日本語通訳者・翻訳者の育成である。現在は、言語のみならず、歴史などの専門科目にも重点を置いた教育が行われている。卒業生は日本語教師、日本企業の現地スタッフなど、幅広い分野で活躍している。一方、毎年の卒業生で日本語関係の職業に就く者は決して多くなく、年に数名程度である。

留学に関しては、大学間交流協定などにより、筑波大学、北海道大学、東京外国語大学、大阪大学、埼玉大学などに各機関毎年2～10名程度の交換留学を行っている。

上述のカザフ国立大学をはじめとした主専攻コースにおいては、日本語能力試験のN2まで到達する学生も多いが、第二外国語コースにおいては初級レベルである。そのため、日本語能力が就職に結びつくことはほとんどない。

学校教育以外

2002 年よりアルマティに日本センターが創設され、ここでは初級・中級のレベル毎にさまざまな日本語コースが開設され、当初は年間を通じて約 400 名が受講していた（春コース、秋コース、夏期インテンシブコース合計）。その後、カザフ国内の経済状態の悪化などで受講生が減少傾向であったが、2010 年代後半に入り緩やかな回復傾向が見られ、コロナ禍での減少の後、2023 年には再び年間で 400 名以上が受講している。

2006 年より首都アスタナの日本センター分室でも日本語コースが開かれ、年間約 120 名が受講していた。2024 年現在は対面クラスは 1, 2 クラスで、それ以外はオンラインクラスで受講している。

2020 年春コース途中より、新型コロナウィルスの感染拡大の影響で授業はすべてオンライン授業（オンライン会議システム ZOOM 使用）に切り替えられた。2021 年春コースまでアスタナ、アルマティ合同のオンライン開講となり、2021 年秋コースに一部対面授業を再開できたものの、2022 年春コースは感染状況悪化のため、再度全面オンラインとなった。2022 年夏コースから対面へ戻り、2023 年秋コースでは、入門から中級まで全 9 クラス、192 名が学んだ（アスタナ、アルマティ合計）。9 クラスのうち 6 クラスはオンラインで実施しており、受講生の中には少数だが地方都市在住者も存在する。学習者の年齢層は 10 代から 60 代まで、学生から社会人までと幅広く、学習目的も就職や留学、旅行、趣味などから伝統文化やアニメ、音楽などに対する興味などさまざまである。

最近の傾向として、中高生の受講生が増えている。上記コース以外には、アルマティ市内において、民間学校 1 校で 50 名を対象に日本語が教えられている（日本人教師 1 名）。手毬や書道などの日本文化のクラスも人気がある。アスタナにも民間の日本語学校が 1 校あり、こちらでも 30 名ほどの学習者がいる。

また、セメイ市（旧セミパラチンスク市）では、ソ連時代に核実験場があった関係で、広島市の市民団体との交流が 20 年以上も続き、毎年 2 名の高校生が広島市の高校に留学し、日本語を学んできた。しかし、2018 年に 20 回目を迎え終了した。このプログラムの修了生による日本語教室が不定期ではあるがセメイ国立医学大学で開催されている。2013 年より、セメイ市の在留邦人がボランティアとしてナザルバエフ学校で国際理解教育の一環として不定期で日本語講座を担当していたが、現在は行われていない。

3.教育制度と外国語教育

教育制度

教育制度

4-7 制。

初等・中等一貫教育（シュコーラ）。従来は 11 年制であったが、2006 年度より一部の学校が試験的に 12 年制を導入している。2015 年にはすべて 12 年制とする計画があったが、まだ完全に移行していない。シュコーラの 1~4 年生が初等教育（6~9 歳）、5~11 年生が中等教育（10~17 歳）にあたる。このうち 1 年生から 9 年生までが義務教育である。私立のギムナジウム、リッツェイもある。NIS は 12 年制を取っており、フランス語、ドイツ語、トルコ語などと共に 2018 年より日本語が選択科目として取り入れられた。NIS は 2024 年現在カザフスタン全土に 224 校作られている（日本語を開講しているのは、アスタナとアルマティに 1 校ずつ計 2 校）。

高等教育機関には大学（4 年制）、アカデミー、音楽院、高等専門学校などがある。大学の教育システムは、高等基本教育（スペツィアリスト）5 年間に続き、高等専門教育（アスピラントウーラ）3 年間があり、日本の博士課程に相当していた。これは旧ソ連時代からの独自の教育制度であるが、ヨーロッパスタンダードに移行する

ため段階的に廃止され、高等基本教育（バカラーブル）4 年間、高等科学教育（マギストラトゥーラ）2 年間、高等専門教育（ドクトラントゥーラ）3 年間に移行した。また、ボローニャプロセスにも加入している。

教育行政

初等、中等、高等教育機関のほとんどが教育科学省の管轄下にある。

言語事情

カザフ言語法によると、カザフ語は国家語であり、ロシア語は公用語として位置づけられている。また、英語を加えた 3 言語を習得すべきとの意向を大統領は繰り返し強調している。しかし、近年、国家機関における統計、資本、技術などの専門分野に関する書類などは、カザフ語で作成され、教育の現場においてもカザフ語による教育が増えつつあり、カザフ語の国家語としての位置づけが強化されてきている。また、カザフ語の表記には従来キリル文字が使用され、2025 年までにラテン文字へ完全移行することが決定されていたが、2024 年時点では一部で目にする程度で、表記の移行が大きく進んでいる様子は見られない。

外国語教育

2013 年度、大統領の命令により、初等教育にあたる 1 年生からカザフ語・ロシア語に加えて英語も必修科目となった。言語ギムナジウムでは 2 言語（英語と、ドイツ語・フランス語・中国語・アラビア語・トルコ語のうちの一つ）を同時に勉強している。

外国語の中での日本語の人気

東洋言語の中で最も人気が高いのは就職に結びつく中国語である。次に最近、企業進出が目覚ましい韓国語の popularity が高まっている。韓国はテレビドラマなどのポップカルチャーの人気の高まりも影響があると思われる。日本の文化や経済に対する関心も決して低くはない。奨学金獲得や留学の機会が少なく、就職につながりにくいという課題はあるが、学習者数は上昇傾向である。

大学入試での日本語の扱い

大学入試で日本語は扱われていない。

4. 学習環境

教材

初等教育

日本語教育の実施は確認されていない。

中等教育

アスタナの NIS 1 校において『みんなの日本語 初級 I』スリーエーネットワーク（スリーエーネットワーク）が使用されている。また、アルマティに於いても、2018 年 9 月より日本語が開講された。教材には当初『みん

『みんなの日本語初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）を使用していたが、2019年11月よりJFの『まるごと 日本のことばと文化』（三修社）に移行。その後、再び『みんなの日本語初級Ⅰ』が使用されている。

高等教育

『みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ』（スリーエーネットワーク（スリーエーネットワーク））、『中級へ行こう』（平井悦子ほか（スリーエーネットワーク））、『ニューアプローチ中級日本語[基礎編]』（小柳昇（日本語研究社））、『ニューアプローチ中上級日本語[完成編]』（小柳昇（日本語研究社））、『みんなの日本語中級』（スリーエーネットワーク（スリーエーネットワーク））、『BASIC KANJI BOOK VOL. 1、VOL2』（加納千恵子ほか（凡人社））、『INTERMEDIATE KANJI BOOK VOL. 1、VOL2』（加納千恵子ほか（凡人社））、『まるごと』（国際交流基金（三修社））などが主に使用されている。

また日本語以外の科目として、日本文学の授業も展開されており、『古事記』なども取り上げられている。（カザフ外国語大学）

学校教育以外

2002年9月、日本センターが創設され、さまざまな日本語のコースが開講されている。主に使用されていた教科書、教材としては、『みんなの日本語 初級Ⅰ、Ⅱ』（前出）、『文化中級日本語Ⅰ』（前出）、『みんなの日本語中級』（前出）、『INTERMEDIATE KANJI BOOK Vol.1、2』（前出）などがある。

2012年春に開設されたJF講座では、『まるごと 日本のことばと文化』（国際交流基金（三修社））を使用している。『まるごと入門A1』『まるごと初級1 A2』『まるごと初級2 A2』『まるごと初中級A2-B1』『まるごと中級1』『まるごと中級2』に対応したコースを提供し、2017年以降は『まるごと』をすべて修了した学習者向けのクラスも場合により開講している（市販の教科書をアレンジし、使用）。

その他、私立の語学学校がアスタナに1校、アルマティに1校ある。アルマティの学校では、日本語以外にも日本文化体験などの講座を多く展開している（日本人講師1名）。アスタナにも、語学学校があり、30名ほどの学習者が在籍している。

IT・視聴覚機材

以前は、カザフ外国語大学などでLL教室を用いてビデオ、テープなど視聴覚機材を使ったLL教育が行われていたが、校舎の移転によりLL教室が使用できない状況となっている。カザフ国立大学においても、日本の援助によって作られたLL教室の老朽化が進み、使用できない機能が多く、通常の教室として使われている。

インターネット環境の整備は、あまり進んでいない。カザフ国立大学では筑波大学の支援で数台のノートPCを教室に導入し、インターネットを使った授業ができるように環境を整えているが、他の高等教育機関においてはインターネットを用いた授業はあまり行われていない。教員によっては、PCを持ち込み、パワーポイントを利用した授業を行う者もいる。

5.教師

資格要件

初等教育

日本語教育の実施は確認されていない。

中等教育

アスタナ NIS1 校においては 4 年制大学主専攻日本語卒業、日本語能力試験 N2 以上とされている。

アルマティでも同等の条件を求められているが、新卒や経験のない教師は採用されにくい状況である。

高等教育

大学では、助教授職以上は博士候補の学位を持っていることが最低要件となっている。常勤講師は、現地人の場合は 5 年制大学で日本語を専攻した者または修士号を取得した者となっている。日本人の場合は日本で得た修士号以上を持っていることが要件になっているが、外国人の査証取得が年々厳しくなっており、日本語教育や言語学の専攻でなければ、査証が発給されない。

学校教育以外

日本センターで教える日本語教師は、大学の日本語学科を卒業した者、または日本語能力試験 N2 以上の水準が要求される。筆記試験と面接を行った上で採用を決定し、その後 1 か月半の研修（OJT 含む）を行い、授業を担当している。

日本語教師養成機関（プログラム）

- カザフ国立大学東洋学部
2 年生と 4 年生の時に「日本語教授法」、最終学年では「教育実習」がある。
- カザフ外国語大学東洋学部
2 年生と 4 年生の時に「外国語教授法」の授業が行われており、3、4 年次には「教育実習」がある。
- カザフスタン日本人材開発センター（日本センター）
一般的な日本語教師養成のためのコースは開講されていないが、不定期に『まるごと』教師養成セミナーを行っている。また、年に 1, 2 回『まるごと』教師研修も行っている。
- JF のプログラム
「日本語教師研修（短期・長期）」などの日本語教師を対象としたものがある。

日本語のネイティブ教師（日本人教師）の雇用状況とその役割

高等教育機関で最も日本語学習者が多いカザフ国立大学に 1 名（JF 派遣の日本語専門家は 2019 年 2 月末で終了）、ユーラシア大学に 1 名、カザフスタン日本人材開発センターに 1 名（JF 派遣の日本語専門家 1 名）、民間日本語学校に 2 名、日本人教師がいる。カザフ国立大学においては、主に大学院の授業を担当し、ユーラシア大学では学部 4 年生と大学院の授業を担当している。その他の教育機関の現場においても、発音や微妙なニュアンス、及び日本文化、日本事情を教授できる日本人教師の果たす役割は大きく、ネイティブ教師数の増加が望まれている。

教師研修

2012 年 8 月に『第 4 回トルク諸国日本語教育セミナー』（JF 助成）が開かれ、日本から 2 名の講師を招へいたほか、キルギス、ウズベキスタン、トルコ、アゼルバイジャンから日本語教師が参加した。ほかにも 2013 年 11 月中央アジア国際研究集会『日本語学習辞書開発の支援を考える』（筑波大学共催）、2017 年 4 月『第 21 回中央アジア日本語教育セミナー』（JF 助成）などのセミナーが開催されている。これらのセミナーにおいては、カザフ国内だけではなく、中央アジア各国からも教師がそれぞれ総勢 30～40 名前後、参加している。

その他、JF 日本語国際センターで実施される訪日研修には、長期、短期合わせて毎年数名の教師が参加している。

現職教師研修プログラム（一覧）

不定期に教師会、カザフ国立大で勉強会が開かれている。また、カザフスタン日本人材開発センター（日本センター）において『まると 日本のことばと文化』（前出）を使用した教師研修も不定期に行われている。

JF のプログラムのうち、訪日研修として公募による日本語教師研修がある。

6. 教師会

日本語教育関係のネットワークの状況

1998 年に日本語教師の発意により「カザフスタン日本語教師会」が発足した。同会は日本語教育の発展を図ることを目的とし、日本語教育に関する情報交換の場、日本語教師相互の親睦・交流の場としての意義を有する。不定期の例会を行っている。

教師会行事としては、毎年弁論大会を実施している。2020 年から 2022 年まで新型コロナウイルスの影響でオンライン実施となったが、2023 年 3 月の第 26 回大会より対面実施へ戻った。

最新動向

特になし。

[教師会・学会一覧へ](#)

7. 日本語教師派遣情報

国際交流基金からの派遣

日本語専門家

カザフスタン日本人材開発センター 1 名

その他からの派遣

（情報なし）

8. シラバス・ガイドライン

高等教育においては、教育科学省が作成する国レベルの基準（ガイドライン）が存在する。このガイドラインに従って、カザフ国立大学、カザフ外国語大学、ユーラシア国立大学の3大学が、高等教育の年間プログラムを作成する。各大学は、このプログラムに準じ、年間の指導プログラムを作成する。

[シラバス・ガイドライン一覧へ](#)

9. 評価・試験

現在のところ、カザフスタンで日本語学習者のレベルを測る共通の基準は存在しないが、各教育機関における修了試験は、教育科学省の「修了試験実施法令」に基づいて実施されているため、学習の到達度・レベルを測る効率的な基準とされている。同法令では、初・中教育機関、及び高等教育機関における修了試験の実施方法、科目、可否の判定基準などについて詳細に定められている。

このほか、全国的、全世界的な基準としては、日本語能力試験がある。カザフスタン国内のみの同種の試験は存在しないため、現在のところ日本語学習者のレベルを客観的に測定する基準は、日本語能力試験のみである。同試験は、日本の公的機関が実施する試験として非常に権威あるものと認識されており、日本語学習者にとって学習意欲の向上に資するものとされる。2011年から、アルマティで7月と12月の年2回の実施を始め、アスタナでは、翌2012年から年1回12月のみの実施を開始した。（2020年7月から2021年7月までの3回は新型コロナウイルスの影響で中止）

評価・試験の種類

- 各教育機関における修了試験。各教育機関学習者を対象。
- 日本語能力試験。日本語学習者全般を対象。

10. 日本語教育略史

1991 年	カザフスタン独立
1992 年	日本語教育の本格的始まり アル・ファラビ名称カザフ民族大学（カザフ国立大学）東洋学部中国語学科において日本語コース開設
1993 年	カザフスタン共和国内閣管轄下 言語委員会設立 カザフ国立大学中国言語文学科で第二外国語選択開始
1996 年	アルマティ第2学校における日本語教育の開始
1997 年	「カザフスタン共和国言語法」制定 アブライ・ハン名称カザフ国立国際関係外国語大学東洋言語学部において、第二言語選択開始（現在は行われていない）

1998 年	アブライ・ハン名称カザフ国立国際関係外国語大学東洋言語学部において、主専攻コース開始 アルマティ第 12、123 学校、ジャンプール第 45 学校における日本語教育の開始 大統領令により「言語開発と機能」国家プログラム承認 カザフ国立大学にて、東洋学部極東学科設立。コース名が「日本語日本文学コース」となる
1999 年	L.N.グミリョフ名称ユーラシア国立大学にて日本語学習コース（第二外国語）設置
2000 年～	カザフ語教育の活発化
2001 年	日本語能力試験実施開始
2002 年	コクル学校における日本語教育の開始 カザフスタン日本人材開発センター（日本センター）創設
2003 年	「2002-2003 年学習期間修了試験実施」法令発布 カザフ国立大学にて、東洋学部極東学科から日本語学科が独立。学科名を「日本語学科」から「日本学科」に変更 カザフ外国語大学において外国語言語学、教育法分野の大学院コース開設
2004 年	「2001-2010 年にわたる言語開発と機能」国家プログラム採択
2007 年	カザフ国立大学東洋学部日本学科に大学院修士課程設置
2009 年	KIMEP の日本語コース（第二外国語）が閉講
2010 年	カザフ民族教育大学の日本語コース（第二外国語）が閉講
2011 年	日本語能力試験、年 2 回の実施を開始 カザフ国立大学東洋学部日本学科が韓国学科と併合され、「韓国・日本学科」に変更
2012 年	日本語能力試験、アスタナ（12 月）での実施を開始
2013 年	初等・中等教育（シュコーラ）の日本語コースが閉講 カザフ国立大学国際関係学部の日本語コース（第二外国語）が閉講
2018 年 9 月	アルマティ、アスタナ NIS 各 1 校で、選択科目として日本語教育が始まる（非正規）

2019 年 11 月

アルマティ、アスタナの NIS 各 1 校に於いての日本語教育で、『ま
るごと 日本のことばと文化』の使用を開始。